# 、ーゲルの知られざるトリアーデ

# ― 『精神現象学』の理念型 ―

### 小屋敷 琢

ル独自 れてくるし、 時において完成した体系として解釈するの してもその方法が著作全体に一 る人はいないとは思うが、一応それを肯定すると として解釈するか、それとも一応は しているのか、 大きな問題は、これがいったいどんな体系を構成 るかどうかでまた違 の理解も 精神現象学』の解釈にとって、 ということだろう。 この弁証 一様ではなくい 法が成立 さすがに あるいはどんな体系の第一部なの L ってくる。 『現象学』においてへー この著作を破綻 ていることまでは否定す ろいろな解釈が 貫して適応されて さらに なんとい 八〇七 そ L っても た体系 口 0 か 能だ で別 年当 弁証

実際そのことをめぐって果てしなく議

論

が続

かし、

方法というと全体の叙述からみればど

しには、 法な 情況 そのも のが私の確信 またたんに緒論と序文だけをいくら読み比べてみ みたところで、なんら説得力はもちえないだろう。 にもこの 要項目の全内容を検討する必要がある。 ているからというだけでなく、 を主張するためには、たんにヘーゲルがそう言 たところで、その方法はつかめは る方法は決して剔抉 0 証 かしこの著作が体系として完成 拠 のを把握することなし かを確定しなければならない。そのことな 著作 を固めていくだけでなく、この著作の いくら当時のヘーゲルの言及を渉猟して の核心である弁証法がどのような方 である。 できな 本文で叙述されてい 11 には、 つまり文献 しない、 その根底に してい そのため という 歌学的に ること

にほ る当 というよりは までに述べてきたもののなかにすでに含まれてい 容と別 と別個 くったカテゴリー表やそれを形式的に研 は序文の ええな 四五頁)⑴ かな 時 0 0 「のものではなく、 その本来的 してヘー ららな も なか 研 け のではなくて、 で発者にたいする批判ではあ ども、 いわけだから、「方法の概念は で注意 むし ゲルの方法とはそもそも んらかの な提示は論理学に属しており、 ろ論理学そのものである」(四 心してい そのことを心 矮 つまり事象そのも 「事象そのものの歩 る。 小 化な それ 配 n は るが、 て 単 カント 究 知 紬 のの の営み L 化 して それ が 内

7

#

ツ

[式的にならざるをえな

五

的

海

体 「これまでに述べてきた」本文のなかに「すでに含 は図式的に提示することも まれている」からには、 図式によってヘーゲル哲学のすべてを把握 0 ららな 解釈から抽出されて構成され 1 ゲルの方法が内容と不可分のものであ かれ 11 が、 てい 方法を提示することの ない『論理学』 私たちがそれをいったん 可 能 だ。 であ ていい それは本文全 るとし 目的 るも のに ても、 b ほ

> する みい ほどの成果を挙げることができるかに その運動の軌跡がどのように描かれるのかを発見 よって、実際の叙述がどれだけ変化に富んでおり、 にこの図式を原文と比較し、 叙述のなかに当てはめていくためでもなく、 マックス の思惟像がそっくりそのまま、 つ理念型となる」② が終わ のだ。 針とし わ ため だされるのでは 便 それの叙述にとっては高 に 7 にある。 ・ウェーバーのいう理念型のように、 ったあとはもうとりあ て役立てるために t 言 思 い 心い込む な 換えるとそれは、 書物 つまり「 を一 ため かどうかは なく、 に つひとつ 高 すぎな あ またその図式 突き合わせることに るのでは い 11 発見的 体系的 この著作の えず用 すぐれた意 この 読 11 0 3 か 図式がどれ な な 0 羅 解 な かっ 価 針 11 価 を実際の な な 7 值 値 ŧ をも をも かに 味で 反対

ほどまでに三分法にこだわっ Triplizität〕」(四八、四六頁)にたいしてその 私にとって最大の わ このことが解 力 1 明され 疑問 は、 よ る なぜ たのかというこ  $\equiv$ その ^ 1 0 义 ゲ 組 一式の ル 3 は 体 とで 使 あ

は あ

ろう。 はじめてヘーゲル哲学 かどうか ることな かれてい 0 構 ないだろうか。 成 本 そ ほ を確 る 0 半 0 徹 定すること 叙述 か 底 7 7 11 ある る た 組 0 内 2 から 容が方 いは 一分法 体 かが 系 ^ 0 できる 批 特 が どの を揃 法を裏 ゲル自 判 定 が 0 開 簡 ような な えたも 上身、 かれ 5 切 所 0 ば 5 で てい は 方 てくるの 0 現 貫 法 は そこで るの 徹 な 0 貫 す か

#### 埋も n た原 理 対他 存在

て「感覚的 うに思える。 このトリア か していると考えられるが、その三分法をそ (五八八、一一六〇頁)、その基本的 <sup>1</sup>現象学』の構成に当てはめるとき問 は 成 弁 う 寸 11 対 証 即 自 法 い 第 か てい 0 確 つ対自的であると言えるかどうか。 原 1 **沙理的** 段 7 るとき、 信 うト たとえば ーデは 階 にくるものが な説明として、即自― は 知 ij ^ 常 たし アー 感覚的 「意識 ゲル自身が使 悟 7 デは使い古 性 知 確 賞 とい 信 というト から 即 から 対 う段 か 題が生じ な意味は I され 自 用し 自 つ対自 的 ーリア 的 階 対自 てい 0 てお 17 0 的 1 るよ おい ま 妥当 り る。 ま な n 即

> をも あ 題 0 5 であり、 て方法 であるとい それが が崩れ うの てい 妥当しな は る証 どこま 拠 VI で妥妥 に 0 な 7 当 る あ 0 n す か ば る どうか 0 そ か

+

こと か? なに 自己 己意 統一するとは 幸な意識 なく、 を統 意識 性は 属 識 とい 0 自由 を統 を統 L う疑問が 解 感覚 釈 (スト 7 L 即か 者 と知 い 生命 を悩 る てい 7 VI ア 覚 わいてくる。 つ対自的 0 ح ま か る る 主 を す。 自立 ? 0 義 統 0 か か • 立性と非 とい それ とい ? ? L スケプ 7 う問 うのは で 宗 理 11 シス は 教 件 自 る は は 立 VI 0 そも 性 主 な は か h 尽 精 義 意 ? なの そも きる 神と 識 支配 不

と隷

た地点 りが なく、 口 あ L しかしへ って 能 そもそも では わ なる 0 1 わ 悟性は りとし 終わ 段 ゲル す b 0 統 修階に 0 b 一とは ななに は始 0 終 おお 7 あ 哲学に 静 別 り、 わ 11 を始 帰 b 止 0 まりで て、 L 段 0 始 結 80 統 7 階 ま ま お であって、 い ま b あ 11 7 から る。 が悟 る 始 では は て、 11 始 る 0 ま 0 まり 性 0 そ 0 な 目標とは 終着 は 7 で達 n か 11 な お 0 10 点 ま え 成 り、 11 統 0 され ま 運 意 では、 では 終わ 動 緒 力当 0

との すでに誤っているからだ。 な することは は 11 なん に 統 つ を た なの 始 を宗 8 な か? てい できな 教 に 統 が を始 る 達 を 11 0 成 このような疑問 理 8 か? す 性 7 なぜ るの 11 が る 達 なら問 な すると残され 成 0 5 か す ? る はお 題 宗 0 教 0 な 理 そら 立 性と は て方が た VI < 絶 理 0 解 対 た 神

5

ろん うに提示してみ このように考えるし ことを るもの 自的 剔抉され するしか をとお っており、 叙 これらの 述 なもの、 の仮説に され (存在)という原理が剔抉されうる。 論 L 証 では、 てい て貫 な することは 11 てい これらが 原 即かつ対自 る 徹 よれば、 た 理 あらか 即自 原理に注目し L な は 7 いい きれ か 的 11 トリア 困 な じめ結 ると思 な 緒論 それどころ 難かもし いに 11 的 ŧ な のでは 0 の方法は 1 整 to てい わ 論を先取りしておく - デを形 理されたかた の、 対 n n な 他 くことから出 る かかか な 11 的 我々にた 0) この著作 で、 かとい 成 な な t しか り込 そこ 7 0) うふ ち もち 全体 U る 2 2 す 発

原

知

前

0

抽 ず は 規 U め 定 が に ~1 意 ゲル 識 に に 即 なら L てどのように出 0 7 知 と真 理 0

け

係に から 分か てくる 対象であり、 理と「我々にたい 自 また存在するものとして措定され は 0 に は あ 、対他存在〕―即自存在」である。このような 的 存 X た 5 t ここに展開され 原 在と なも るかというと「この探究にお 知 別する。 0 11 X 百 理 か 頁) 別 が を からは にたいする存在 L 時 同 i のの て存 かたちを現すことになる。「 想 に のであ 7 自 起するとき」(七六、 知は我々にたいして存在する」(七 側面が、 区別され 在 11 己 つまり同 態と考えら する。 る。 を関 り、さしあたりは する存在」とはどのような関 ているのは ある 連させ 真理といわれるのだ」(同 様に .... ており、 対他 い 知に関 は 7 存 か ..... 「意識 この 在〕を即自 八五 る或るも てい 連 我 或 11 つるも 意 7 連 すな K 頁 (自己) る。 識 知 関 は 7 が 0 11 0 0 わ に 我 る 存 を が K 0

即 も 0

他

識

は な す 識 2 n 0 通 りあ 経 にたい か つまり一 験 どうかに にとって真理とは り、 つめは L て本質 かかかっ か そ あ てい れ 我 る 々 5 VI るが が知 は結 は 対 真なるもの 象 を概念と名づ と概念 の組 同 U とが

する

U

事

る。

係を示している。二つめは「我々が対象の本質あ であり、 みることにある」(七七、八六~七頁)ということ 味することは、 概念に一 に理解するならば、吟味することは、 すなわち対象が他のものにたいして存在するよう るいは即自的なものを概念と名づけ、それにたい ることによってはじめて「我々は、 自身で生じること」(同前)なのだ。そしてそうす うこの両契機が、我々の探究する知においてそれ (Für-ein-Anderes- und An-sich-selbst-Sein)  $\bowtie S$ につぎのことをしっかりと保持していくことであ 態であると言えるわけだ。ここで驚くべきことに 在」の関係を示している。それゆえ両者は同 いる。すなわち「本質的なことは、全探究のため ーゲルは以上の二つの原理で充分であるとして 在するもの て対象というもとで対象としての対象を理解し、 存在する事象 八七頁)が、それは「即自的なもの― それは「知〔対他存在〕―即自 致するかどうかをみることにある」(七 あるい 概念と対象、 概念が対象に一致するかどうかを (die Sache, wie sie an und für は対象と名づけるならば、 対他存在と即自 即 対象がその I存在」 かつ対自 -対他存 I 存 在 じ事

> sich selbst ist ) 現 で充分としておきながら、 という規定が出現する。それまでは「対他と即自」 同前)という。ここで突然「即かつ対自的にある」 れ、 しかもそれらが統一されているのはなぜな を考察するところへと到達する」 いつのまに「対自」が

0

か。

わっていることが想像されるが、「対自」とは、 が「意識〔自己〕―対他存在」という関係にかか ていることでもあることがわかる。 のトリアーデにたち帰るならば、対自という側 へと向かうことであるとともに、 もう一 度「意識 (自己) 対他 存 在 他者に対立し 即 自 面

versteht)、この自分の悟性 八四頁)という自惚れ(Eitelkeit)に譬えている。 を楽しんでいるのであって、 しており (daraus in sich zurückzukehren てしまい、そこから自己へと帰還することを理解 すなわち「この自惚れはどんな真理をも空虚にし ヘーゲルは理性と悟性を比 なもの〔即自的な本質〕を避け、 〔das Fürsichsein〕のみを求めている」(七五、 論のなかの、上述の議論をする少 較して、 いつもあらゆる思想 (eigenen Verstand) 悟性を「普遍 たんに対自存 ĺ

的

在

のとの連関においてのみ現実的であるも 3 ない るという働きは ることは ており、 ても悟性を ぎのように肯定的に規定しているが、 否定できない。これにたい 界で愉悦に浸るとい えに対自存在 てお こでは悟性のことを理性との対比でかな うのも即自 びた自 のその てい 対 そして最も驚嘆す ゆるもの 存在するも b 的 可能 0 悟性 自我じたい ると思え その 我 な \* 厝 を 純粋な りの を区別することだが、 だ。 の、 存 の本質として規定され が 3 3 力のもつ力であ 在にほ N のから逃避 純粋な自 t 悟性 すな る。 は つまり だすだけ う側 0 も肯定的 自 わ 我 から分離させら ~ 0 かならず、 ここで「普 b き偉 拘束され もつ力で ち悟性とは のエネルギー」と規定 我 引 面が対自存在にある i し であ 0 VI 大 にも否定的にも て序文では て、 働 て考え り、 な、 る」(同前)と。 きであ たものや あ そのような 遍 純粋な思惟 上述 てい 働き り、 その 的なもの なけ あ る そこに b 「分断」 の(対 た偶 悟性 れば のように るのは り郷 な 11 働きであ 他 は そ 0 こと 0 む お を 0 客 な 0 だ。 も 寸 L は 世 観 11 0 妥 10

対自存在であるとも言えよう。

〔自己確

を得るとき、

n

らである。 て自分自身をみいだすときだけなのだ」(同 意義 ように悟性の否定的 力である。それは思惟のエネルギ の真理を獲得するのは、 本性であると断じている。 (Zauberkraft)」と呼び、それこそが主体とし 由を獲得 在 我 反対に真理 を見 のエネルギーなのだ」(三六、三一頁)。こ す VI 固 る そのような分裂において自分を見失わ だすべきことを 有 0 の現 は 存在や隔離された「特定 な働き 否定的 ただ絶 証 のなかにこそ肯定的 な なぜなら ^ t 対 0 ゲル 的 ーであり、 の途方も な分裂 「精神が は、「 そし 前 に 0 魔 自 7 お 力

自

を

体

7

0

内

容

0

わりに

たん

な

る

存

であっ まり純粋 不可分の統一であって、 Selbst」とも言われる。「し んらよそよそしいものではなく、 のであ このような純 他 7 ており、 者 る。 な に た 思惟 7 自己は、 n 11 する存 自分自身のもとにあるのだ」(五 ゆえ他者にたい あるいは対自存在 粋 自 在とし 我 つまり直接的に普遍的 な概 11 かし 対 て直 念のことで 自 す ながら自己とは 存 接 る むしろ自分 的 存 在 直接的な存 に自分 は、 在 あ そ 自

己意識 かな するからとい を入れたところで「感性 なら悟性とは 接的 あ そ 0 理 V り、 一段階 解からすれ な なぜ最 れはま なかでは 性と独自性であって、 面 な さらに 別なき区別」すなわち無限性として把握 感覚 がら 11 へと向 に自分自身を思惟によって保持するがゆえ 質を 3 に た別 う たし 後に位 また、 的 理性は、『現象学』においては「意識 t を指 理 あたってい 性 最 確 かっている自立性な てそれ 0 うのは、 初に位置づけられるし 「悟性 ば奇妙なことのようにみえる。 よそよそしさを感じることな 信 摘 九頁)。ここで 置 確 問題であって、 というトリ 悟性とは L づけられ 知覚 か ており、 て、 は るが、 一否定的 あまり言い訳に 最終的 自己 感覚 即かつ対自的 悟性」とい 「意識 これ るの それ アーデにはじめ 悟性 的 は他者との対 理性 ^ ようは は通 か、 1 確 のであ は は 端 信 章のなかで ゲル 理性」とな 統 うな P 常 というこ 的 肯定的理性 かりに る な は 知 「意識」章 0 に ならな 的 覚 弁証 か 対 な 統 で う 0 7 立 自 力 とで 出 るほ 感性 なぜ は 法 に 存 性 現 を 面 第 直 あ 対 在 自 0

> 第三 思惟 とは よう が示 みても 存在 無 に むしろ『論理学』では らゆるところに自己を力として見いだす対自 こうし 界は把握 7 る。 た物がふたたび本質的なものとして出現している。 ある物がそこでは問題にされてくるが、この「物」 ることは お 機 段階にくるのは奇異に感じるかもし 的 知覚 され 0 な え 11 にすぎな わ 7 な な 0 てみれば悟性 返 7 もの)にし 0 な 間 することは てい され 原理 かるように、 かでなされ 存在 対 11 0 は生 象 社会や 11 ることに また、 のでは で 現存 とい あ 命 でき とし か妥当し た自然の の統一力というのも、 0 歴 第 た。 史、 そ 在 ないだろうか。 生命や主人と奴 うのも、 な て「 れほ ず るが 部「存在」 悟性によって否定され 思惟 対自存在」とある 対象的 ど無理の まし ておらず、 そこ 0 営み てや 性 意 世界 は あ 隷 などは 奴 対自存 有 n る論 の対 赫 機 性 ありと 章 な L 純 制 的 に 0 在が のを 的 か 粋 象 捉 度 な 限 な \* な あ 0 え

な 三頁)という並列 他 3 存 に 在 7 現 契機 象 の記述があるし、 対自 0) な 存在 か でも 0 契機」(四二八、 即 、また一 自 存在 0 契

は

な

11

こと、 が継承されてい ⑻。こうして、ここに 『精神現象学』での三契機 ぎのように規定され つまり他者にたいする存在、そして対自的である な同等性、 05-っきりと論 自分のもとにあること、の三つの契機である」 即自的であること、つまり自己自身との つまり他者のなかで単純に自分へと帰還し 年の「中級クラスのための論理学」では、 そして現存在または規定性をもつこと、 理学 るとみなすことができるのではな の三つの契機が全契機としてつ ている。 すなわち「全契機と 単純

他

は リットは 的な差異として指摘されている⑷。 (一九四六年)でもフィヒテやシェリングとの決定 イポリット 一礎として『現象学』 できなかった。 このように対他存在を非常に重視しているのが ゲル哲学 ゆえ 対他 九七二年一一月)において「即自一対 - 『ヘー て組み込むことまでは 八「即自 の特徴 存在を弁証法の また、 ゲル精神現象学の生成と構造』 であり、 の体系全体を解釈すること 対他 加藤尚武は「疎外と承認 対自」という原 なかにトリアー そのことじたい おこなってい しかし、 デ な な 0

ている。

きに、 ことは、 語ったのは、 六年)では「残念なことに、 な解釈は最近でも変わってい 肥大してしまった」と特徴づけている。このよう として完結すべきものが、『精神の現 は書かれなかったし、『論理学』に対応する「現象 「不幸にして『精神現象学』に対応する してっ る(5) ル「精神現象学」入門 は未完に終わっており、 なると、 0 -対自」の連関について示唆的 本文の意識 現象学』全体を解釈しているわけでは 意識 書かれなかった」⑥ すっかり忘れてしまったようだ」の かし彼もまた、 この が 最初の感覚的確信の場合だけ 何と何を対比して吟味したの 『緒論』で示した構造を明示する の自己形成の過程を叙述する 「新版」 さらに このトリアーデを基 ために哲学体系として ないようで、『へー ヘーゲル 「『意識経験 (有斐閣、 な 叙述を 象の学』へと が 7 精 神 か を

だろうか。

ぞれに必 義性を孕 な原理 以上のように 然的 の特質となっている。「対自存在 んでおり、 な関係 たんに をも 対 他 「対自存在」とい 5 存 ており、 在と即自存在と それ が 0 にか 弁 7 両

対立 いるし 逆に 関 断ち切って排 て対 らな ころに ことも うな両 いうとき、直 係は あ 対 係 あ 5 普遍的 たモ る。 小なく う 峙 事 「てはめることはどれほど有効な 他的というときは 1 偏 義性 1 態 関 あ あ 即自的 ーデを ザ ある を指 る。 係 様では ゲ このように ている直 ることを指 在するものにも使 ル たん なもの、 を胎懐しているのだろうか。 な |接的にあることを指すことも が他的に がら 絶 VI クを形 すときもあ なもの、 また自然に根ざした個別的なば 0 心えず なな に はたして はそのようなこととはとりあ 使う用 解 接 現 質的で個 実的 、曝さ 釈 成 してい 「即自 なっている思い つまり自体 対他的 語 相互に同一 てい n 『現象学』 てい な関係にあるときや対象 n は なによりもまず他者との るが、 7 別 わ ば つねに る。 か 的 れる。 + 対他 なものなどはどのよ なけ な事 11 ありとあ (独立) 性を指す 性と差異 る。 また相 他者との関 一両義性をもつこ の全体 れば 0 態も指 込みも それにたいし 対自」という だろう 即自的と ならな 50 0 万 ある がを含 よ すこと 指 係を らば えず ると う 成 な 7

## 次元の交錯

あり、 に である。 や対他 面的 11 いに混乱を招いて墓穴を深く のなかにはさらに てはめてすむほど、ことは直線的でも 性とともに決定的で重要なことは、 即自—対他 意識―自己意識―理性」がそれぞれ「即 にがな 対自」であるとしても、 でもないということである。 h 的なもの、 さらに感覚的確 だかわけがわ こうしてどんどんあてはめてい の方法 一対自」というトリアーデ 「感覚 対自的なものが現れ を剔抉するため か 信 5 のなかにも即 的確信— 即自的である「意識 なくな 掘っているだけ 知覚 ってきて、 つまり、 に、 その てい 自 な を単 用 くと、 的 11 自 語 るから なも 純 よ か 0

りに

対

他

う

面

解きほ は るため を導入し う原理だけではなく、 至難 成 と内 の技であるが 4 りここでたんに なけ すようなも 容が 0 非 ればならな 常に 構 造 ので を 込 ここにじつは 解 み それとは次元 入っ なけ 110 体 即 すること 白 それは た重 ればなら 対 層 他 ^ な の異 的 7 な な 現 对 ゲル 110 象学 なる t 自 それ 0) 自身 で 原 を 理 11

うにも思えて虚し

くなな

る。

な

0

が 章

よけ

のよ

とえば その あり、 位 は なも t は t は ては対他 0 0 メタ 即 に 苦 よ 場 0 から わ 0 لح 3 0 自 7 よ あ 5 外 在 重 11/1 (Element) 1 知 で 的 咸 る す に が か そ 知 0 から X られ なも n 覚的 存在 覚覚は て自 当 ント それ 7 別 ゲ 的 あ 応 体 ju ル は 面 境 か 0 0 な 0 では U 地 7 かる 系 は 0 確 ح よ #) 規 す 權 11 たよう 「感覚的 換え 意識 が規 りは る 7 0 独 に 信 L 定 造 い 11 0 と契機 る。 1 自 す 7 哲学に特有 لح を が 対 を 訳 即 変わ んると、 要 ゲ 0 自 ぎ あ 定 X 規 働 象 2 それ クタレ され 素 用 0 的 な る 確 定 いい だ # b IV -自己意識 7 (Moment) らず け 0 よう っつ も な 思 語 信 7 11 が は 「元素 重 1 お たと え \* 0 られてい を 7 わ 自分と同 ル 要な な のに で 「意 知覚 11 ある 7 0 使 メタレ n か 場 に るよ なら 論 る L 用 論 あ すぎ る。 外に ても、 概 識 あ 理 理 理 わ 11 L 以外にも、 るが 念で が に 7 を 性 \_ け る次 U は う な 1 悟 ず 章 ル 性 次 固 あ ほ 叙 0 制 あ 11 11 る。 では 元 有 述す 様 の次 る その あ のうち 元 限 か あ 域 ح に る な 即 る す 0 1 5 3 悟 依 お 0 4 関 7 面 あ 自 ま 元 n た 的 性 で 然 交 る か 係 的 n 11

よう 構造 7 る での 叙述 れ 要 所 思 純 粋な実体 11 0 11 あ 両 11 素 る 者 0 全 粋 うトリ 1 ている。 な 面 に 場と を含 を解 意 な意 精 か で 的 体 神 味 部 で 確 t 0 神 0 が 信 あ あ 0 に 内 識 0

お 11 7 は あ 部 0 に てそ U あ て伝 る 0 要 もの 統 素とか 的 を成 な 理 元 り立 素とい とは たせ うよ て る

あたりは外的 て契機とい ゲル自身に 多く アー t L 2 明するのに決定的に重要であるの どうしてこのような概念が『 を依 だ両 を抱 る 7 り、 解 説され み 自 あ デ 0 然宗 なも りな 0 存 語 うのはも だ。 義 VI たのは 1 Ũ 性 ってもらうの のとし がら、 ゲル 啓 教 てい とい に ることが り返って あ 示 る。 る。 芸術宗 っても 宗 つぎの「 0 0 ぱら内 教」 て現 自己 真 その 11 意 多 つまり自己 がよ n 場 は 教 を規定す 箇 的 لخ あ 宗 る ま た 所 なも 教」 たり 啓 11 W は う か 示宗 現象 「宗 章に る内 私が 0 それ 0 0 7 教」 外 そ あ は 学 部 7 に 7 る あ 使 的 n n 5 0 わ る 0 た 3 な ま

0 場 0 (Element des Denkens) 自 形 0 一分の意 内 式にお 容 識 、即自存在) VI の内容であるのは てであ り、 な すな 0 は で あ わ 現 ち る 最 存 精 初 在 は 神 0

を

るところ

0

るい Elemente seine Natur auszubreiten) けること (in jedem seiner Momente als in einem 0 とづいている。 であ ことを意 他 三つの場とは (五五七~八、一一〇七頁)。ここで登場 詳 存 の本性を精 契機以外の く運 存 を形 在 は 細な運動 しているのは、 たときに精 これ り、 ることに 思 0 対他 林 惟 識 すな 的に結びつけること、 で ら三つ 自 0 してい すること、 神のの 的 的 即 は な わ 0 な場 しかしこの規定性は、 神 よ 自 な ①純粋な実体 場 す の契機 ち自己意 る。 が つ 的な場、 契機のそれぞれにおいて繰 場 ものでも な は 形 である。そしてこれ て、 つの場に 一つの規定され 成される。それ 表象におい すなわち表象そのも 5 ち ③自己 表象と他者存 (Diese drei Momente) 自己 0 個 識そのも 2 な 間 別 一の三つの契機とし 表 の形式にあ VI あるも 的 意識 に あ な 0 て精 まり したが 0 # 3 7 0 のとし たあ 在 媒 0 0 ぞれが 神 からの 他 体 #) 場 らの る場場 つて U り方 神の 者に ある が は ح 相 0 降 0 場 り広 互 で な b る。 が る 神 4 る 2

自

ことの いるのだ(五七二、一一三二頁参照)。 にすでに たあ 的」とは新 三の て去 な ゲルの言う「終わりは始まりであ 4) 意 場 とではじめて統一は達成され、 5 0 が終 味に つぎの 場 n る に ほ たな即自だからである。 わ お 0 て自己 かなら 段階 では ったところで、 て以前の二つの場が解消さ の即自的 0) な な \* 11 11 のとな よ なぜな な場へと踏み b つまり三つを遍 って 重 要 5 お なことだが るし これ り、 それ 即 ここそ とい か 込 ٤ け h 百 3

7

的

実在 このように を知るという契機である」(五五九、一一一〇 (2) 実在の他者存在 対自存在 ている。 徴づけている。「したがって三つの契機が区別され そこでの三つの契機をヘーゲルはつぎのように特 また「純粋な思惟 おり、 (本質)である対自存在の契機、そして 実在 すなわち 〔1〕 の契機、 その 0 即 契機 純 白 に粋な思り 場 すな 0 対 他 の場」にかんしてではある 規定にし が であ 支配的 わち他者にお 0 実在〔Wesen〕 り、 対 場」 自 たがっ な原 かつ他者にたい とい とい 理 て即 う即 う契 VI て自分自身 自 自 7 の 働 存 が )頁)。 含 から

学の は、 ならな 諸契機として登場させ、それらを遍歴しなければ のように場が生成 が完成し が生成していくという運動をつうじてのみ、 をみいだすことである。 るのは、 を認識すること、 すなわち「絶対的な他者存在において純粋に自己 のなか が付着し、そしてこれらの契機はすべて意識 を繰り広げるとき、 の契機をもっている。この「直接的 前提としているのは、 Wissen im allgemeinen〕である。哲学の始まりが の行う経験の学である」(三八、三四頁)。 (Gestalt) として登場する。この道程の学が 場におい 根拠および地盤であり、すなわち知一般 知と知にたいして否定的な対象性という二 でもわかりにくいかたちで指摘されている。 ような場と契機との必 い。「精神の直接的な現存在、 透明になるのである」(二九、二四頁)。こ て、 がこの つまりこのエーテルそのも 精神はな していく過程は、それを精神の これ 〔知一般の〕 あるいはそれが要請し らの 自分を展開 しかしこの場は、 契機 然的な関係は 場にお には な現存在とい 2 つまり意識 い 0 その その て自分 対 0) 契機 それ てい 序文 0 女 が、 場 形

まり否定性にたいする評

価は、

序文と緒論

て、それは同時に懐疑を否定する〔Ver-Zweifel〕

したがって否定の否定にほかならな

うか。 運動 の固 り意 緒 n ことこそが、絶望〔Verzweifelung〕 くものが、 それは同様にこの運動に内包される。消失して なされうるときには捨象すべきだと言われるが、 虚偽と名付けられたものが、ふつう虚偽としてみ のとその真理とを形成してい いう過程のことであり、この全運動が肯定的 自分の契機を産出し、そしてこれらを遍歴すると うにまとめあげている。 される。 八一頁)と同じことを示しているのではない るべきなのだ」(四六、 換えている。そし は 有 識 で語られる 懐疑 0 の場に ここでヘーゲルは契機を意識 場によってそれぞれの契機 う知と対象 同様に否定的 〔Zweifel〕の道程を徹底的に遂行 むしろそのまま本質的なものとみなさ おいて登場する契機は 懐疑 の対 てこのような思想をつぎのよ の なものをも内包しており、 すなわち「哲学の場とは 四四頁)と。この思想は、 立 をも 絶望的な道程」(七二、 る。 つことに したがってこの 0 の役割は 道程 それ の形態と言 な ぞれ であっ だろ 規 する

11

まったく隔たりがない。

本質 第三段階、「個人性」において「事象そのも れを、 こでいっそう豊かで具体的な意味を獲得する それ以前 それ 契機をそれぞれ「陶冶の領地」と「〔信仰による〕 二段階、「自己疎 Tierreich〕」と呼んでいるし、また「精神」章の第 成立する場を「精神的な動物の領地 〔durchwandern〕、精神へと浄化する」(七二、八 機という用語を形態と言い換えているように と述べている。ついでながら、ヘーゲルはこの契 しかし、 完結すると、あたらしいエレメントが誕生するが、 〇頁)と。領地という用語としては「理性」章の い換えていると考えられる。たとえば、 トなども指摘 て「あらかじめ定められた逗留地として、 ずれ の領地」(三二七、七三五頁)とし、 ぞれの意識が遍 5 逗留地 に の発展段階がふたたび姿をあらわし、 このあたらしいエレメントのなかに 〔Station〕とか領地 7 している。 態 も、 外する精神」 を一つひとつ歩い 歴していくことは 哲学の場 たとえば「最初の発展が にお が産出し いては分裂 (Reich) (das geistige た契機 イポリッ さらにそ 緒論に 7 巡 と言 は、 を、 (8) そ h 連 お 7

言い換えている。また契機のことを極〔Extrem〕れを「別の地〔Land〕」(四四一、九一二頁)ともこから「道徳性」への移行を説明するさいに、そ

い換えているところもある。

弁証法 構成がどのように組み合わされているのかに のトリアーデを絡めてさらに考察していきたい。 て、「即自 以上の分析を基礎にして、 の重要な原 対他 理 対自」と「場と契機」とともに、 である「普遍 実際に 5 特殊 現 象学』 個別

### 一 両義性のモザイク

「『五/六年草稿』でヘーゲルは、『 「精神の哲学」への転換を果たしたと解釈され は n 年段階の論理学 温との からの哲学 原 なお未完 理である」
®にもかかわらず、それは る論理こそがヘー 九九三 理」 崎 隆『ヘーゲル弁証法と近代認 統合を求めようとした」 であ 年)によれば 成 0 る である」(10)。 礎石 . 7 形而 絶 に据え 対 ゲルの弁 的 上学の普 普遍 個 また つつ、そこからさらに 別 証 性 . 0 遍 法的論理学の基本 特殊・個別で示さ 「生の哲学」 (11) 原 近代のより高 ・特殊 理』 :::: 識』(未来社 かし 個個 「四/五 まだ をみ から

た とりもな 11 11 が イエ る ため 0 契機 成 る。こ は金 立 悪戦苦 (13) 九七 L 0 お 0 と簡 特殊 お 子 論 ているは 11 期 別  $\equiv$ 原 武 理学」に さず「 て弁証 闘 0 理を基 年、 潔に、 性 蔵 てい 0 11 1 原 契 ず 法 う ゲ たし 著 で 礎にして、 しかしは おいては 1 遍 が ル ゲル あ 確 は 理 (12)九六二年刊) 普遍 る。 立 は とい 殊 され 0 完 性 っきりと規定さ \_ 前掲 0 精 概念 全体の解釈 0 う。 両 成 個 神現象学』 ているとす 契機が含 0 別 3 面 には 「中級 を n であ つなごうと お を進め クラス う (以文 ま 個 n 7 5 n n 別 性 7 7

ゲ

あ 意 別

は いることだろう。 は 叙述 は な ることである。 0 0 7 でが崩 かも 解釈 0 対自一即 論 だ 金子 もこ U け n L た箇 が n n 7 た な の研 かつ対 あるい 所 か 個 ることを VI が、 は たちで何度も 究 個 神現 別 別 書に示唆され VI 八自」を は くつ 特 性 象 明 2 かし決定的に 学品 か その 特 5 0 殊 か 义 普 に 遍」 性 に 式 ま お を ま たところが大 述され L あ 使 7 ようと 違う ては そ 遍 7 て実 性 n のは を 8 ぞ あ ま 際 7

> 遍 対 体

to

は

即

自

的

で

あ

るという単

純

化

み

る。

h

7

1

ゲ

ル

独

自

0

契機

は から

両

義 5

性 n

を

以上 では を対 ば金子とは える。 うふう 特 自 って、 iv たり H 識 的 発 0 い 自に が普遍が とい 的 即自)」(14) 高田は 純 で あ は意 ず を にそくし 支え 即 な る 個 性 7 n が、 承認と自由』(未来 それ 図的 別的 なぜ 自 ŧ 対 う に 0 別 契 的 応 的 0 適切にも 違って、 個 順 7 行為 機 な自 た経 的 な を剔 させてトリ が であるという場合、 に な 别 ても金 11 選ん 5 t が な 心 暗黙の前 か る 然 5 な 0) 0 験 to 抉 0 7 t とし 法 契機とし 普遍 でい 0 の学 H 子がこ 「行為する理 現象学』 0 VI L の、 意 は 0 則 てい 発 を対 る。 させ 識 であ t 7 P 対 提となっ (自体) 出 自 不 解 1 か n るが 社 発さ の方法 的 他 7 デを 釈 一九九 もちろん 5 るから、 7 別 で 的 始 分 11 性」に せ なも 快楽 解釈 を即 てい 個別 め あ で 対 7 ること 7 る道 自 ح あ 九 自 る。 る。 を個 11 る ま は 四 L 的 年)が る かん たも な意 即自 を、 すぐ ず は t は 徳 たとえ 遍 別 卓 を 的 0 個 識 的 3 n 見 0 あ 別 0 7 6 0 な

あ 出 t

高

自 よ 対自的なものではあ なら快楽とは れ な 両 百 理 一的では 楽を即 って抽象的 義性を孕み 様 も 解 7 徳を対 ので お 対自的 自的 普遍 な わ 自 あ 11 でも 性はは からであ に 自然に根ざしたも 的 な つつも、「行為する理性」に りうるし、逆に即自的でもありうる。 形成されるも な 個 U まう。 普 別 あ もちろん即自的でもありうるけ 充 りえな 性 りうるの 遍性とするべ 分注意 る 個 心の法則を対 別 11 L 性 なけ のである である。 0 は である きで n もちろん 徳は思惟の かぎり 他 あ たが る。 的 お かぎりで な い 対 面 力に って で 特 ては な 的 自 即 ぜ 殊 的 な

うに 図式 典型的 特 な は また、「 0 け お なく、「普 方法 な 規 n を VI 5 定 に す ば てであり 7 る ならな 精神 現れ な す 個 絶 る が 遍 別 対 0 か 説 現 7 的 か 11 0 という限定のも い。『法の 特殊 特殊―普遍」とい 学 るの まりまず n この な 抽 ており、 体系期 は(15) 象な 個 と適 哲学 別」とい 、「意志: 41 それ 用 の著 è 『法 絶対 とに 0 す うト は は 緒 作 るのは うトリア 的 考えられ 意志 から得られ 論 権利)の哲学 リア な普 では 11 をど 避 0 さ 1 け 1 遍 そ な 0) 0 5 デ デ を け よ 独 が 6 n

n

10

最

初

0)

段

降は抽る

象的

普

遍性にふさわ

『現象学』とは違っ 的 X 規 る。 11 う、 別 定 で なものである。 それは抽 (性から(つまり第一段階の抽象的普遍性から) 立 あ で てへの移行であ る あ る 制 限 (16)象的普遍性 な とし 段階 た形 つぎに「自我はまた区 限 に 7 性 式 悟 り、……自我はこのように お 6 に 性 り、 のもとに あ り、 す が ぎな < そ る 自 n あ 11 あると予 は 自 た 悟 り、 こ 性 一別な n 0 想でき が も よ 純 き 即 は る 自 P

象的 て普遍 機である これが自我 0 n 别 0 考えられる。 あ 他のものとして措定し、「以前の〕普遍的 とによって、 性 を主体性と言 統 るのをやめ 1) で 一である。 る (17) 性 遍 あ 1 性 る へと連れ戻された特殊性 とは 0 デ 。この特殊化という作用は (19)0 さらに最後に「意志は る」個というように対他的なも 現存在一般のなかへ踏み入る。 ŧ VI 違 。この場合の普遍性は とに 換えてもい って具体的 自己へと反省 体 系 が 構想 な普 11 この さ 遍 性 n すな それ 7 よ 0 うな な 0 「自己を あ 最 わ に 両 t 対 初 ち 的 独 よ 契 0 0 0 契 ح で 抽 個 0

自己自身をある規定されたものとして定立するこ

3 0 うことを簡 から 而 図一 基 義 一本的 件 は 個別性=即自=自然 単 な 表 連 現 な図 関 さ 特殊性=対他=歴史 式で説 n 7 2 (1 0 te 明してみたい。 普遍性=対自=思惟 原 15 理 0 2 両 は 0 式 古 \$ あ 的 n だけでは なく 定 5 な 義 あ ると言え 心的 対 え ろんこれ 面 な

\$

0

0 は 応 ず ように

関 は

係

が

面

る。

うに絡んで重層的な構成をつくっ の方法が破綻 ような始 場と契機」、 象的 のは明ら れでは実際の本文では、 0 意識 おお か 11 まり方か かで (権利)」 7 両 から始まることに 「個別 心してい 義 あ 性を含む 1 る。 5 で始 ゲル -特殊 るのか、 L それ 7 の意図とし 5 X 一普遍 即 に 現 7 、どのように『現象学 あるい なる。 たい 自 象 11 学品 3 7 対 L 0 0 は 15 他 ては ح 連 7 で 破綻 る 関 は あ 5 対自 糖 個 か がどのよ 違 別 神 0 てい 的 現 7 P 象 な 15

図二

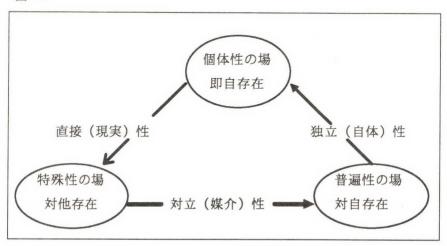
的

で

あ 理 义

原 0

た は



3 5 展 開 す る ta

件 ち 11 自 関 他 15 0 存 在 3 to ときは 0 存在 は る。 係 存 う 関 在 か あ な 面 1 即 る 0 在 側 係 で 0 白 個 デ から 自己 は 契 はは は 別 を か 5 2 林 面 T 11 10 き、 機 # 件 寸 を 対 5 n 直 to 80 7 性 対 + 2 対 有 接 応 る 巡 15 0 直 7 自 具 T 抽 2 差 n 7 ح 接 従 3 場 関 て三つ 属 現 象的 白 異 性 性 存 7 1 係 体 0 15 から をも含 実) と独 在 お 的 お を 的 原 3 を か に そこ 側 保 2 理 n 普 普 0 性と 存 持 0 7 0 7 寸 n 遍 遍 は 面 在 支 7 11 関 性 場 性 み 他 性 1 な 反 %を契機 L は とな と言 対 体 < \$ ح も 0 係 配 11 0 7 、よう 3 他 的 的 5 原 で に 11 0 11 り、 え 共 側 理 う 7 ŧ 独 0 原 る する 立 面 理 とし 有 る な 第三 ٢ 面 林 11 を ح そ が 抽 0 義 る。 対 他 即 لح 自 対 自 7 象 段 同 件 7 n 自 図二 他 (体) 7 It 階 をも 存 が 的 11 る。 存在 即 性 揚 0 0 様 在 あ な 在 2 ح + を 1 対 1 5 0 L も 対 対 た 1] 遍 7 0

だ 1 n な 1) 0 は まだ 示 T す 「直 精 デ 線 1 神 的 义 現 な 7 象 7 付 学 表 置 示にとどま な 5 づ る。 0 H 章 -5 から h. n 7 -から 7 n 7 基 7 11 お 3 本 n 的 か L 2 to 0 構 11 よ

な n

> 0 0 すは、 7

あ 対

る

から 0

日

コ

0

次

元

か

5

2

る

2

思 遍 性

惟

な 場

0

神や

道

は

依

然

ح

7 で か タテ

他

場

にすぎ

表象

性

义 =

感覚的確信一知覚一悟性 =意識 =事象そのもの 意識 - 自己意識 一理性 =絶対知 事象そのもの一精神一宗教

の次元にお لح 徳 に 日 ま 0 7 11 0 0 ては 11 7 次元に 7 11 考 対 る。 自 察 お す 0 る 同 場 11 よ 7 に 様 あ

依 元

然と

L 章

> 即 0

0

場に るが

で は

対

他

場 自

に

あ

展 n 開 を す 平 3 面 2 的 に 义

74 テ な とヨ る

な 他 対 7

P 対

1

デ

が

7

お

n

即

自

対

n

自

次 応 1)

のこと

ょ

0

2 規 3

が

示

さ

定 場 元

3 に

n

る

自己

意

章

たとえ

ば n

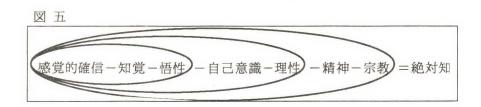
タテ

0

次

部 てあ 層的な絡まりが叙述の必然的な展開を支えている。 JU 义 こ でさらに細かく区別され、 るは 0 即自 対他 対自 义 四 ず 意識 即自 事象そのもの だ。 絶対知 の平 面 的 自己意識 精神 対他 な 構 成 対自 理性 宗教 は、 場と契機 『精神現象学』 『論理学』 2 n ぞ

そ 開そ 叙の 性 がいに る 歩 わ 神 そ で す 実 真 託 2 0 は 0 2 る か 0 る 7 0 述 現 き 対 論 てお 場 さ 後 質 0 to でっ こ 5 他 象 な 理学』 は 事 そこ れ 0 的 普 で 0 2 脱 学 11 あ 0 象 展 終 は却 な



の複雑で重

n

0

童

0

り立 をえ 体を表示すると図五になる。 幅 に 0 分 か 体的 な 都 け 合の (1 7 に 提 そ 『精神現象学』全 ため さらにこれ 示 n すること を 割 細 愛せざる か 11 をよ は 項 紙

- (1) ヘーゲル『精神現象学』からの引用は、ズールカンプ版からおこなうが、それに対応する店を参照する。引用に際しては、本論文のなかに表示することとし、たとえばズールカンプ版の五五七ページと岩波書店版の一一〇七で、カラように一括して示す。しかし必ずしも訳文は、邦訳では傍線に置き換えた。また引用文は、邦訳では傍線に置き換えた。また引用文は、邦訳では傍線に置き換えた。また引用文は、邦訳では傍線に置き換えた。また引用は、ズーのなかの「」括弧は引用者の補足である。
- (3) Hegel Werke 4, Suhrkamp, 1970, S.166. (川原栄蜂・伴ー憲訳『哲学入門』日清堂書店、一九七七年、一二五頁)。

(2) 祇園寺信彦・祇園寺則夫訳『社会科学の方

かかわらず、フィヒテにとってとおなじく、いう理論をとっていたが、しかし、それにも的なるものとが、知のなかでは同一であると4)「シェリング自身は、主観的なるものと客観

は、 である」(同書、上巻、岩波書店、一九七二年、 とその変容とを研究するあたらしい仕方なの くもハルトマンが注意しているように、意識 はりたしかである。……これこそが、いみじ 知り世界を知ることであるということも、や し、この自己を知ることが、また<他者>を たしかに自己を知ることなのである。しか だから、この<他なるもの>を知ることは、 れるのは、<他なるもの> ―― 対象、世界 るがままにとらえられるが、 知』なのである。このあとで、多かれ少なか あるいは自然 ――との関係においてである。 ることになるわけである。ヘーゲルにとって れ人為的な仕方で、同一性への回帰がなされ 主観的なるものであるかぎりにおける知の 事態は同様ではない。意識はあたえられ にとっても、 超越論的観念論は、『 意識があたえら

る。関係するのもののきわどい接触面で、そとかの概念も、同じ発想法から出て来ていイワードとした即自 an sichとか対自 für sich(5)「ヘーゲルが、その弁証法的思想を表わすキ

二五~六頁)。

る。 である」(『ヘーゲル哲学の形成と原理』所収、 己の単独性を回復したものが、対自 für sich 合わせて自覚する必要があるが、こうして自 己を回復するには、一度、 の「他に対する」という関係の局面から、 für anderesとなって他に対してしまう。 切って、 との接触を、 ihm (an ihr etc.) という言い方をしてい 未来社、 自分に直接的に接していること、つまり、 したがって、即自 an sich と言えば、 るとき、 だから即自的なものはすぐさま、 『一方の側に即して』成り立つ事態を述 一九八〇年、 単独性を保持しているあり方であ その接触のきわどい現場でたち ゲルは『それに即して』 三〇〇~一頁)。 自己を他に照らし 自分が 対他 る。

- (14) 前掲書、一六二頁。 (15) ebenda, S.193. (前掲訳、一五一
- (15) ルートヴィヒ・ジー (14) 前掲書、一六二頁。
- 九九五 規定する。ジープは、対他存在については 確な規定をもっていないし、 における実践哲学』上妻精監訳、 つ対自的 が第 異 なってい 三段階を対自的な個別性としている な場として設定し 一 〇 四 る。 頁、 原著一九九二年刊)と ているところは、 第三段階を即か 哲書房、 明

そが絶対的反省なのである」(『ドイツ観念論と (綜合、個別性)。この三つの要素の統一こ

6

前掲書、三二八頁。

前掲書、

五一頁。

8

10

前掲書、前掲書、

二四七頁。

前掲書

前掲書

二五三頁。

Hegel Werke 7, Suhrkamp, S.49, ∞5. (藤

16

129

七年。一九三頁)。『ヘーゲル』岩崎武雄編、中央公論社、一九六野渉・赤澤正敏訳『法の哲学』(世界の名著

(17) ebd. S.52, ∞6. (前掲訳、一九七頁)。 (19) ebd. S.57, ∞7, Zusatz. (前掲訳、一九七頁)。 (19) ebd. S.54, ∞7. (前掲訳、一九七頁)。